上村忠男著『バロック人ヴィーコ』

みすず書房

ジャンバッティスタ・ヴィーコの主著『新しい学』（一七二五年、三〇年、四四年）は、明晰さと晦渋さをしばしば混在させた、まことに特異な様相を呈する書物である。これは、ヴィーコ自身が三人称で自己を語るという形式をとった『自伝』（遺稿、一八一八年出版）にもある程度共通して認められる特徴である。だが、その淵源を短絡的に書き手の狷介不羈な性格に求めるようでは、ひとはヴィーコのよき読者たり得ないだろう。その点で、著者が展開する分析は、犀利にして詳細きわまりない。『自伝』は、デカルトの『方法叙説』に対抗し、学問的人生の紆余曲折を虚心坦懐に語る「率直さ」を標榜している。しかしながら、そこに頻出するのは、叙述しがたい衝迫なり霊感なり鬱屈なりを（主に「運命」や「前兆」といった）喩によって説明づけるという一見率直ならざる修辞技法なのだ。この事例を、『イタリア人の太古の知恵』第一巻「形而上学篇」（一七一〇年）と『新しい学』で提起された省察の方法の個別的適用としてとらえることから、本書は説き起こされる。

今日のヴィーコ研究の方向を定めた名著『ヴィーコの懐疑』（一九八八年）において、著者はすでに、デカルト的方法の要諦をなすクリティカ（判断術）に対し、ヴィーコの重視するトピカ（発見術）の有する意義をみごとに定式化していた。この論点は、本書において、『新しい学』の第二版と第三版の巻頭を飾る一枚の寓意画をめぐる緻密な考察へと結びつくことになる。「国家制度上のことがら」を描いたとされる、その謎めいた扉絵は、「一挙的総覧」を可能にするという「トピカ的な知の特性」を例証するものにほかならない。クローチェを筆頭とする主流派の学者たちは、この口絵とそれに付された「著作の観念」と題する序文にあえて論及しようとしなかった。それと同時に、彼らは、トピカとインゲニウムあるいはインジェーニョ（機知、構想力）をなによりも重んじるヴィーコの「バロック人」としての側面をも、不当に看過してきたのだった。この側面に接近することから「歴史的にもはるかに妥当な」理解が可能となるだろうと著者は示唆する。このような観点はおそらく、ヴィーコをもっぱら近代の歴史哲学の正当な始祖としてのみ鑽仰してきた、ミシュレ、ディルタイから和辻哲郎やアイザイア・バーリンあたりまで続く旧来の議論の流れに異を唱える決定的根拠となるに違いない。

「真なるものと作られたものとは相互に置換される。」このあまりにも重大な公理は、歴史哲学の方法論の展開という文脈のみにかかわるものと速断されるべきではない。その点を明らかにするために、著者は、マルブランシュのいう観念の神起源説や、同時代の自然法論、科学革命（「プラトニズムのバロック的反転」）、ならびにデカルト、スピノザ、ロックの形而上学的認識論とヴィーコとの接点をさぐる。さらに著者は、より大胆な介入の試みを企図して、南方熊楠の構想した諸科学の統一化のモデル（いわゆる「南方曼陀羅」）とヴィーコ的な発見の過程を、両者の文体的特質も踏まえつつ徹底的な比較検討の対象とする。このような形で具現されたインゲニウムがたとえばエドワード・サイードの思想的営為と対位法的に結ばれるとき、いかなる領野が開かれてゆくか、注目するべきであろう。

（鈴木　聡）